

論文の要旨

論文題目 ポストモダン・バーセルミ——「小説」というものの
 魔法について
氏名 三浦 玲一
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 18 年 3 月 31 日

本論文は、百以上の短編小説と四本の長編小説（うち一つは死後出版）を残した、アメリカ合衆国の作家ドナルド・バーセルミ（Donald Barthelme, 1931-89）に関する作家論、作品論である。三部構成、六章立てで、偶数章で彼が生前残した三つの長編小説を扱い、各々の偶数章に先行する奇数章において、次の章の議論への導入をはかりながら、短編小説を扱うかたちとなっている。巻頭に、筆者とバーセルミ作品との関係を示す、短な「はじめに」を置き、巻末には、バーセルミンの略歴および作品一覧、そして索引を付した。

ドナルド・バーセルミという作家の全体像を示すことを目標のひとつとしてはいるが、バーセルミの実生活はあまりあきらかとなっておらず、更に、彼の作品の魅力が彼個人の人格と（通常の文学作品において意味されるような意味においては）深く関係しているとは思われないという点、また他方、彼の作品をどのように解釈すべきかという問題は、文学におけるポストモダニズムという運動をどのようにとらえ評価すべきかという問題としてとらえられてきたという点をふまえて、本論文は、作者についての実証的な研究よりも、二十世紀の文学理論一般を整理し、それらがバーセルミ読解にどのような意味を持つのかを検討することにより注意が払われている。

ジャン＝フランソワ・リオタール、ジャン・ボードリヤールから始まり、フレドリック・ジェイムソンを経て、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートにいたるポストモダニズムの議論、ロラン・バルト、ジャック・ラカン、ミシェル・フーコー、ジャック・デリダらに代表される、いわゆるポスト構造主義の議論、そして、エレヌ・シクスー、ジュリア・クリスティヴァ、リュス・イリガライらのいわゆるエクリチュール・フェミニン派以来、ジェーン・ギャロップからジュディス・バトラーへと至るフェミニズムの議論の三系統が、本論文で検討される主要な思潮の流れである。

生前からポストモダニストとして評価されたドナルド・バーセルミの作品の魅力を的確に説明するためには、これら思潮の成果を積極的にふまえ、彼の作品とこれら思潮の同時代性を正しく検討し、そのことを通じて彼の作品の革新性を文学史のなかに誤りなく位置づけることが必要であると本論文は論じている。

第一部は、ジークムント・フロイトの精神分析の議論を現代的に読み直したジャック・ラカンの主体観、言語観から、バーセルミの作品を読み解くことを基本的な枠組みとする。ここでは、彼の作品に通呈する主題のひとつを他者表象のジレンマの解決と同定し、他者は正しく表象されなければならないが、正しく表象された者はもはや他者ではないので、このジレンマを解決するためには、表象という営為そのものへの根本的な批評意識が必要だということを指摘した。

短編「風船」(“The Balloon”)を論じた第一章は、序論的な性格を併せもち、ポストモダニズムという語が膾炙する以前のバーセルミについての批評を梗概することから始まる。モダニズム期以降の芸術としての文学作品に必要な言葉そのものへの意識、もしくは言葉の自律性への意識の系譜をたどり、そのような言語観を前提とするときあらわれる、リアリズムと表象の間—つまり小説作品は世界をどのように写し出すのかという問—そして、人工的な言語から構成された作品を批評家はどのように評価すべきかという問が検討される。ラカンの言語観をそのような流れの現代的な極点と考えることで、バーセルミにおけるテキストとは、身体性のアレゴリーとした存在することで意味をもつのだと結論づける。

バーセルミの新しさを検討するための対照として第一章ではヘンリー・ジェイムズがしばしば言及されるが、更に、第一章、第二章にまたがる議論の補助線として、バーセルミの実際の知己であった美術評論家ハロルド・ローゼンバーグの議論が参照される。これは、バーセルミの作品の美学を、当時のアメリカ美術の議論と関連させることで、その一般性を検討する手段となっている。

第二章は、バーセルミの第一長編『雪白姫』(Snow White)を論じる。極端に断片化された、お伽話のこの奇妙なパロディが、フレドリック・ジェイムソンの論じるポストモダニズムの諸特徴によく当てはまることを確認したのち、しかしむしろお伽話のパロディであることは、そのお伽話が現代女性に対して強力なジェンダーの規範として機能していることへの批判が込められていると論じた。そのような視点から考察するとき、作品の断片化は、ラカンの述べる主体観を例示するものと理解される。更に、読者があえてテキストに参加して、諸断片を統合しなければ、テキストは読解可能なものになりえないという作品構造は、物語というものが、人に、主体を構成するために必須な神話として機能することを示しているのだと説明される。物語という概念を、このように、力、権力の問題として考えるとき、作品は、ナショナリズムとグローバル化との拮抗の上の危ういバランスのうえにたつポストモダニズムの実践として読まれうるという可能性を提示して、この章は終わる。

芸術作品を、政治的に、権力構造の問題として分析しようとする試みは、ポストモダニズムにおける批評のひとつの特徴であるが、とりわけ、作品の創造者もしくは統御者としての作者とテキストとの関係を、ミシェル・フーコーの示した権力論から読み解こうとしたのが第二部である。

小説におけるポストモダニズムの議論は、これまで通常、メタフィクションもしくはポストモダン・パロディという概念から整理されてきた。短編「ボディガードについて」(“Concerning the Bodyguard”)を論じながら、これら概念を整理しようとするのが第三章となる。ジェイムソンのみならず、パトリシア・ウォー、マーク・カリー、リンダ・ハッチョン、マーガレット・ローズらの知見を整理しながら、議論は、ポストモダンという概念が最初に影響力をもって使われたロバート・ヴェンチューリ、チャールズ・ジェンクスら建築の議論にまでさかのぼる。最終的には、スラヴォイ・ジジェク、トニ・モリスンらの差別論に言及しながら、個人が自身に偶然付随していると感じる属性、すなわち偶有性を、むしろ「自然」なものとして認識される効果が物語にはあり、物語がもつそのような政治性を顕在化することこそがポストモダンの営みであって、そこにおいて作者とは、テキストの創造者ではなく、管理者として認識されるべきであると結論づける。

自然でないものを自然なものとして認識させる装置のもっとも影響力のあるかたちが、精神分析のいうエディプス物語であり、それを批判的にパロディしたのがバーセルミの第二長編『死父』(The Dead Father)であるという主張が第四章の中心命題となる。この議論は、一方では、フーコーがテクノロジーという語で象徴的に示すような、中心や起原を持たない権力概念が、(ネグリとハートが指摘するような)ポストモダンな管理の形態の問題として重要であること、他方では、フーコーが「人間」の誕生という言い方で指摘する事態が、「文学」の誕生の問題と本質的な関係をもつ事象である可能性を指摘する射程をもつ。

第一部、第二部の議論から、フーコー的な権力概念を認めるとき、それ自体が自律した言語からなるテキストが誕生する(と認識される)ことを確認したのち、このような自律したテキスト観を提示する代表例としてのジャック・デリダの脱構築の議論を検討するのが第三部となる。ここでは、ジュディス・バトラーのいわゆるジェンダー・パフォーマンスティヴィティ論と脱構築との関係を検討し、これらの議論が生じる前提としてのアイデンティティ概念の誕生を、ナショナリズムの問題として検討する。

地の文のない、バーセルミの特徴的な問答形式で書かれた二つの短編「説明」(“Explanation”)と「芸術学校の入り口で」(“On the Steps of the Conservatory”)を検討する第六章は、これらテキストが無意味で、自律的な言語の運動を示していると考えられるとき、それらはジェンダーを描いているのだと理解されると主張する。このようなテキストの様態は、ポストモダンな芸術家の代表例としてあげられることも多いアンディ・ウォホルのポップ・アートと相同の戦略から成立しており、この議論から、いわゆるクィア理論と言語のパフォーマンスティヴィティ概念の説明へと論点はひろがっていく。われわれが自然なものとしてみならず「女らしさ」、「男らしさ」が、「自然」ではないものとして提示されるのがクィア理論の視点であり、このような試みこそが、ポストモダンな作者とテキストのあり方の底には通呈していると、この章は結論づける。

長編『パラダイス』(Paradise)を論じた第六章は、前章で指摘したジェンダーのアレゴリー

としてのテキストという戦略をこの作品も提示しながら、ここではその問題は、グローバル化によるナショナルな空間の破綻という枠組みのなかにそれが適切に配置されていると指摘する。八十年代以降の、ナショナリズムについての構築主義的な議論を通覧したのちに、(行間を読む) モダニスト的なテキストの深みとは、アイデンティティ概念を前提とすることによって成立しており、そのようなアイデンティティ概念が暗黙裏の前提となったのは(国民文学創成の基盤でもある) ナショナリズムの結果であり、この長編はグローバル化の侵入を描くことで、そのようなテキストの深みが必然的に不可能となった状況を描くことで、ポストモダンなテキストの誕生の必然性を示唆することに成功していると結論づける。そのような意味で、この作品は、ドナルド・バーセルミの必然的な終着点であると。

本論文は、全体として、かつて「無意味な記号の戯れ」として賞賛もされ批判もされた、ドナルド・バーセルミのポストモダンなテキストの「意味」を、テキストに発見される隠された意味を探ることではなく、むしろ、そのような意味を探る試みに読者が導かれるように書かれたテキストは、全体として、どのような「意味」を持っているのかを検討することで、ポストモダニズムにおける小説を、あくまでモダニズムな手続きとは異なったやり方で、解釈しようと試みたものである。この手法は、バーセルミひとりにとどまらず、ポストモダニズムにおける解釈のありよう全般にとって有意義であることを希望して、採用されている。